

小樽高商軍教事件（上）

倉 田 稔

目 次

- はじめに
- 1 情勢
 - 2 小樽高商社会科学研究会
 - 3 小樽高商軍教事件
 - 第一段階 (以上, 本稿)
 - 第二段階 (以下, 次稿)
 - 4 学生への弾圧
- おわりに

はじめに

これは、小樽高等商業学校（現・小樽商科大学の前身、以下、小樽高商と略す）で起きた、有名な軍事教練事件（以下、軍教事件と略す）について、述べるものである。この事件は、学内的には二つの段階からなることが分かる。

この時、小林多喜二¹⁾は、小樽で北海道拓殖銀行の行員であった。結論的に言うと、小林多喜二はこの軍教事件に十分には関与していないように見える。

1) 本稿は、小林多喜二伝記、第12、にもあたる。

1 情 勢

1921 (大正10) 年11月に、ワシントン会議が始まった。第1次大戦²⁾直後の軍縮会議である。この年は、小林多喜二が小樽高商に入学した年である。翌1922 (大正11) 年には、軍縮は世界的風潮となった。ワシントン会議で決められた条約は2月に調印され、それを実行するため、日本は、戦艦の廃棄などと並んで、海軍軍人では、将兵7500人、職工1万4千人が整理されることになった。陸軍でも全二一個師団のうち四個師団を解消することになって、兵5万3千人、軍馬1万3千頭が減らされた。

1923 (大正12) 年5月10日には、「早大軍事研究団」事件が勃発した。この日は発団式だったが、学内の大衆によってつぶされたものである。また1924 (大正13) 年1月5日、一朝鮮人が宮城二重橋に爆弾を投じた。その直前、1923年12月に、虎ノ門事件が起き、これで、山本³⁾ (第2次) 内閣が総辞職し、清浦⁴⁾ 内閣ができた。この頃、普選 (普通選挙) 運動と護憲運動がさかんであった。それに、前述の軍縮論が盛んになった。1924年 (大正13年) 6月に、加藤高明⁵⁾ 内閣が成立した。護憲三派連合の加藤内閣は、行財政の整理を重要な政策として掲げた。財政整理委員会は、陸軍の四個師団の削減を提案した。加藤内閣は、陸軍に3千万円以上、海軍に5千万円以上の経費削減を要求した。宇垣一成⁶⁾ は、清浦内閣で陸軍大臣であったが、加藤内閣でもひき続いて陸軍大臣であった。すでに1923 (大正12) 年に、彼は、「陸軍改革私案」を作った。

2) テイラー『第1次世界大戦』新評論。

3) 山本権兵衛 (1852-1933) 海軍の長老。薩摩藩出。1913年から14年にかけて第一次山本内閣を組閣。第二次内閣の時は、関東大震災が起きる。

4) 清浦奎吾。官僚。首相になった時は老人だった。

5) 加藤 (1860-1926)。三菱の政治家。憲政会。

6) うがき かずしげ。しかし、いっせい、と言われる場合もある。陸軍大将。六代朝鮮総督。陸軍大学校長。清浦内閣で陸相=陸軍大臣に抜擢されて以来、4代の内閣に入り続け、昭和2年までその地位にあった。加えて浜口内閣でも陸相として入閣した。

この頃の内閣と成立時期

- 1921年11月 高橋内閣
1922年6月 加藤（友三郎）内閣
1923年9月 第2次 山本内閣
1924年1月 清浦内閣
6月 第1次 加藤（高明）内閣
1925年8月 第2次 加藤内閣
1926年1月 第1次 若槻内閣
1927年4月 田中義一内閣
1929年7月 浜口内閣

浜口雄幸⁷⁾蔵相は、財政負担の重さを深くとらえ、行財政の整理を強調した。そして軍制の改革を含む行財政整理原案（大正14年度向け）を作った。それに対して、宇垣一成陸相らが抵抗し、4個師団の廃止、3000万円の節約で妥協した。この節約を宇垣は、軍備の近代化にあてようとした。1925（大正14）年5月に、軍縮が実行された。宇垣軍縮といわれたものである。

この動きの背景には、前述のように、第一次大戦以来の世界の状況の進展があった。つまりその大戦は、総力戦であった。国力のすべてをあげての戦争であった。だから戦争は今後、総力戦にならざるをえない。日本軍部でもそれが徐々に分かり始めてきた。だが日本の工業生産力は、まだ低かったし、大軍隊を扶養できなかった。しかし今後の戦争には、高度の武器が必要になるのである。そこで兵力を削減して、兵器の装備、その近代化を狙った。財政整理の時代に、兵力の温存と装備の近代化の両方はできなかったのである。

宇垣軍縮は、四個師団その他の廃止であったが、それとひきかえに、同時に

7) 浜口雄幸（1870-1931）。1929年7月から1931年4月まで首相。1927年、立憲民政党の総裁となる。いわゆる民政党。

兵器装備の近代化がなされた。火力の増強と航空戦力の整備⁸⁾であった。宇垣軍縮の狙いは、そこであった。宇垣軍縮は、それを推進する派と反発する勢力との対立が深刻化してゆくきっかけにもなった。参謀本部に多かったのは、歩兵万能論、精神的に強固な兵士を多数保有すべき、というものだった。宇垣は、国防は軍人のみの専業ではなく、国民にある、と考えた。これは、総力戦思想である。それに、日本の経済力=工業生産能力が低いという認識があった。

今後の戦争は総力戦であるという予想により、国民にも軍事教練をしなくてはならないと考えられた。そこで軍国主義的な国民世論を作り、国民を統合してゆくために、在郷軍人会、青年団、青年訓練所などと、学校教練とが、必要になった。在郷軍人会は、1910（明治43）年11月3日、田中義一⁹⁾の発案で結成されていた。田中は、国家総力戦を説いていた。戦時に軍隊が多く必要になるので、在郷軍人会に参加させようとした。ただし陸軍全体としては、在郷軍人会を戦時兵力源としては見ていなかった。1916年（大正5年）に、中央報徳会青年部が作られた。1925年（大正14年）に、大日本連合青年団が作られた。1925年（大正14年）末、青年訓練所設置が決まった。当初は、文部省の主導で進められた。

大正13（1924）年13月に、当時の文部大臣・岡田良平（寺内正毅内閣の文相、貴族員議員）¹⁰⁾と陸軍大臣・宇垣の手によって、秘密裡に、つまり文部省と陸軍省との間に、中等学校以上の学生生徒にたいして軍事教練を正課として施す計画が具体化されていた。陸軍省には、予備役幹部の大量養成と失業軍人救済のため、学生・生徒の予備軍化、「思想善導」というねらいがあった。

1925（大正14）年、小林多喜二が小樽高商を卒業した翌年の、2月に、その覚書が文部・陸軍両省で交わされた。それによれば、現役将校を配属する学校

8) 瀨瀬厚『総力戦体制研究』三一書房 1981年、97ページ。

9) 田中。軍人。政友会。海外侵略を積極的にすすめた。治安維持法を制定。

10) この軍事教練について、文相・岡田良平は、学生のあいだにマルクス主義がひろがるのを憂慮し、その対策としてもっとも効果的であると考えていた・・・（金原左門『昭和への胎動』昭和の歴史 1、小学館、1988年 341ページ。）

を、師範学校、中等学校、高等学校、大学予科、専門学校とし、私立学校は任意とした。教練担当者は、現役の佐官か、大尉を中心とした。教練内容は、各個教練、部隊教練、射撃、指揮法、陣中勤務、旗信号、距離測量、測図、軍事講話、戦史などである。毎年4、5日の野外教練が実施され、これを受ければ、在営年限が短縮される特典があった。

同じ1925（大正14）年の4月13日、「陸軍現役将校学校配置令」が、勅令第135号として4月13日に公布され¹¹⁾、学校教練制が発足した。大学を除く官立・公立の中等学校以上の学校に、陸軍現役将校を配属し、学生・生徒の教練を行うものであった。つまり大学、高等学校、大学予科、高等専門学校、師範学校、高等師範学校、中学校、実業学校、である。将校の配属は、陸軍大臣と文部大臣が協議して行い、配属将校は、教練にかんし、当該校長の指揮監督を受けるのである。配属された将校の肩書は、大体、大佐から中尉までである。私立の中等学校以上でも、兵役施行令によって認定を受けた学校も、適用された。

もっとも、それ以外の、中学へ行かない青年は、翌1926年（大正15年）から、各市町村の青年訓練所で軍事教練を受けることになったので、日本全国の青年が教練を受けることになったのである。

全国学生社会科学連合会（略称、学連）は、1924（大正13）年5月にできていた。そしてこの計画を知ると、全国の大学・高等専門学校にゲキをとばして、「全国学生軍教反対同盟」を結成して、反対運動を展開した。一方、進歩的な教育者の一団は、為藤五郎、下中弥三郎（平凡社社長）、早稲田大学の大山郁夫¹²⁾ら、を中心として、政治研究会の有志に援助されて、「教育擁護同盟」を組織して、反対運動に立ち上がった。¹³⁾この同盟は、軍事教練に反対の声明を出した。大山郁夫（1880-1955）は、早稲田大学政治学教授だったが、1915年に辞職した。彼は1918年に黎明会を組織した。そして1923年、早大の軍事化

11) 額額厚『総力戦体制研究』三一書房 1981年。

12) 大山。(1880-1955)。兵庫県生まれ。政治学者、社会運動家。早大教授、その後、追われる。1929年に労農党中央委員長。1930年に衆議院議員に当選した。アメリカに亡命し、戦後、帰国した。

13) 渡辺惣蔵『北海道社会運動史』レポート社 昭和41年、102ページ。

に反対した。

1925年（大正14年）7月16日、学連の第2回全国大会が京都帝大学生控所で開かれ、学生運動をさらに前進させ、「プロレタリア社会科学の研究並に普及」「社会科学研究会の存立権の主張」を一般目標とし、「プロレタリア社会観の体得」と「プロレタリアート社会科学の普及」を任務とする「テーゼ」を採択した。¹⁴⁾

全日本学生社会科学連合会にたいして、政府はまず、大学ではなく、高等学校のそれに解散を命じた。

文部省は、陸軍省の後楯により、強引に世論を押し切って、1925（大正14）年春に、各校内の一年志願兵に対して、「大正十四年七月以後、配属将校により教練の教授を受け、合格したる者はその在営を十カ月とす」という通牒を発して、学内の軍教熱をあおり、同年7月には、全国の大学高専校のすべてに軍事教練を実施することになった。¹⁵⁾

少なくとも後の1940年代には、中学等には、佐官、たとえば小佐、中佐が来た。補佐官として小尉くらいが、1人いた。小樽高商では、旭川師団から大佐1名が来て、補佐官として大尉1名と中尉3名が来た。大尉と中尉は事務もとった。

軍事教練によって、敬礼、歩き方、個人と団体のそれ、銃の教練、小隊長の指揮系統を、学んだ。中学1、2年は徒手、3年から5年は執銃で、日露戦争でも使っていた三八式〔銃〕をうった。大体そんな程度なので、戦争の勝ち目はなかったのだ。春と秋に、授業を1日つぶして、弁当持ちで、野外教練があった。桜町、天狗山、手宮公園へ、いった。また年1回、秋、陸軍の高官がきて、教練を見た。これは査閲（さえつ）といい、一種の試験のことである。その日は、非常に緊張した日だった。¹⁶⁾ 専門学校以上には師団司令部付き少将が、中学校へは歩兵連隊長が、査閲官としてきた。小樽高商には、旭川師団から少将が

14) 久城寿右衛門編著『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』株式会社保険研究所 1981年(以下、手嶋と略す)、62ページ。

15) 渡辺、103ページ。

16) 大津博士氏。

きた。配属将校は、検定をし、生徒・学生は甲乙丙に分けられ、それによって、士官適、下士官適、不適となった。¹⁷⁾

軍事教練が実際に行われるようになったのは、1925（大正14）年の6、7月からであった。だがそれ以前にも、体操の中に軍隊教育的なものを取り入れていた。小樽高商でも、1923（大正12）年ころから、体操の時間に兵式教練をおこなうことになり、「正課」ではないにしても、予備役の陸軍大尉である管安右衛門講師、少尉の加藤講師が、これを担当していたという経緯がすでにあった。¹⁸⁾配置令以前に、小樽高商でも軍事教練があったので、他の学校でもあったのではないだろうか。

高商では学生の制服は、正装、和服、カンカン帽または無帽、靴に下駄という具合に、まったく色とりどりの格好で、教練を受けた。¹⁹⁾

学校軍事教練は、配属将校の経費が配属先の学校側の負担であり、宇垣軍縮によって大量の将校が人員整理されたので、そのためのはけ口、解決となり、軍部としては大変都合がよかった。また軍部が教育に介入できるという、一石三鳥であった。

小樽では、学外の動きについて言えば、1925年（大正14年）八月三十日には、約百人が集まって、小樽総労働組合の創立大会がひらかれた。

初代執行委員長には、境一雄²⁰⁾がなった。境は、1900年（明治33年）に小樽に生まれ、小樽中学を卒業し、早稲田大学を卒業した。大山郁夫に教わったとされる。彼は、小樽に政治研究会を作った。彼はこの軍教事件の一方の重要人物になる。小樽総労働組合の執行委員に、はじめ坂本佐一郎²¹⁾、菊池米吉²²⁾、

17) 同。

18) 夏堀正元『小樽の反逆』岩波書店 1993年。この本は、多くは事実だが、一部はフィクションらしい。

19) 中村の稿、『緑丘五十年史』小樽商科大学 昭和三六年。

20) 後に、労農党北海道支部連合会員となる。三・一五事件に連座。労農党系北海民衆新聞の社長になる。1926年、小樽市会議員。

21) 坂本。その後、労農党小樽支部長。三・一五事件に連座。

22) 菊池。その後、小樽合同労組執行委員。三・一五事件に連座。1927年6月、労農党小樽支部委員。特要甲号共産主義とされる。

鈴木源重²³⁾、高橋英力²⁴⁾がなり、のち、正木清²⁵⁾、渡辺利右衛門²⁶⁾、武内清²⁷⁾が加わった。²⁸⁾これらの執行委員について触れよう。

坂本は、1894年（明治27年）、小樽生まれで、小樽の活動家である。日雇いであって、小樽総労働組合の中心でもあった。

菊池は、1890年、秋田生まれで、小樽の活動家。日雇いであった。

鈴木は、1891年、山形出身で、小樽その他の労働運動家である。夕張炭山で労働運動をし、小樽に来た。

高橋は、1894年生まれ。日雇いで、小樽の労働運動家である。

正木清（1900-1961）は、福島県出身で、1924年に小樽に移住した。1925年（大正14年）に小樽総労働組合に参加し、政治部長になった。

渡辺は、1903年（明治36年）の小樽生まれ、小樽の活動家である。後の小林多喜二の小説「一九二八年三月十五日」の主人公・渡のモデルとなった人である。

武内は、1902年生まれ、函館出身の労働運動家である。

この組合は、初めは、港湾労働者と自由労働者が中心になった三百人前後の小組織であったが、組合組織は急速にひろがった。²⁹⁾

23) 鈴木(1891-1971)。その後、小樽合同労組執行委員長。三・一五事件に連座。戦後、道議会で活躍。

24) 高橋。その後、小樽合同労組会計係。三・一五事件に連座。

25) 正木。1926年、労働農民党小樽支部を結成し、その書記になった。1927年、小樽はしけ人夫ゼネストで活躍した。三・一五事件で検挙され、1930年に、出獄した。1931年、新労農党に参加し、札幌支部長となった。全札幌労働組合執行委員長にもなった。1934年、札幌市会議員になった。1936年、道議会議員（社会大衆党）となった。1943年、衆議院翼賛議会に当選した。戦後、社会党中央執行委員、衆議院議員となり、議会副議長となった。（『正木清伝』労働旬報社 1969年）。

26) 渡辺。その後、小樽合同労組組織部長。三・一五事件に連座。北海道地方評議会組織部長。労農党小樽支部員。特要甲号共産主義とされた。

27) 武内（1902-1947）。その後、労農党小樽支部執行委員。三・一五事件に連座。非転向で獄中生活をした。

28) 琴坂「小樽の労働者の伝統」（『北海道経済』1978・9）19ページ。

29) 手塚英孝『小林多喜二』上、新日本出版社 108ページ。

2 小樽高商社会科学研究会

1923（大正12）年から1926年（大正15年）まで、中野清一³⁰⁾は小樽高商の学生だった。庁立小樽商業から高商に入学した。彼は言う。その頃、社会科学研究会も哲学研究会もあった。前者はマルクス勉強会だったし、後者はカント研究が中心であった。不思議なことに、お互いにいがみ合うようなことはなかったように、彼は思う。伊藤整のいう校風が、マルクス派とカント派とを和やかに並存させるどころか、いとも仲良く競争させる背景になっていた。³¹⁾

斎藤磯吉は、社会科学研究会のリーダーの一人だった。中野と同期である。後に軍教事件の学内首謀者と見られて、退学処分になった。斎藤は、この軍教事件の一方の重要人物になる。

北大で「本格的な社会科学研究会の運動が起こされたのは大正一二年の末からのことである。」³²⁾北大と相前後して、小樽高商にも、社会科学研究会が結成された。ここは北大の自然科学の殿堂とは異なり、経済学専攻の学府であるだけに、・・学内組織としては大いに拡充し、斎藤磯吉を中心に、四、五十名のメンバーが揃っていた。・・・しかし、大正一四年（1925年）十月の軍教反対事件で全国を震駭（ママ）する一大闘争を展開した小樽高商社研も、同年一二月一三日、十四名の首謀学生が無期停学処分を受けるにいたって、組織を壊滅させられてからは、再び立つことの出来ない痛手に追い込まれてしまった。

高商生だった山本安次郎は書く。私〔山本〕は社会に目が開けるにつれて、MSS (Marxian Student Society)に参加し、学生運動、労働運動に関係するに至った。丁度その頃、大学高専に対する軍事教練が始まった。大正14年秋、わが小樽高商の軍教で、関東大地震まがいの「蜂起する鮮人の暴動を鎮圧するため」

30) 彼は後に小樽高商教授として、社会学、哲学、倫理学を教えた。その後、広島大学教授になった。

31) 中野清一 筆、『緑丘』42。

32) 渡辺惣蔵『北海道社会運動史』レポート社 昭和41年、99ページ。この本は、軍教事件については、かなり誤りがある。

という非常識な「想定」に端を發し 軍教反対運動が起こり、毅然として我々も立ち上がった。それは全国に拡がり、小樽高商の名を社会運動史にも残した。³³⁾

当時、M.S.S.が高商にあったのだった。これは正式には Marxian Student Society で、その略称であるが、社会科学研究会との関連がはっきりしない。当時、明らかな存在にしにくかったのだろう。しかしむしろ、これは社会科学研究会だったのかもしれない。それに、読書会というのもこれだったのではないか。この会で、高商学生の黒田力造、手嶋恒二郎は、齊藤磯吉を知った。黒田は、手嶋が1年の時に、2年生であった。

北海道地区は 東北連合会に属し、・・・それが結成されたのは 大正一三年(1924年)九月である。この時代に 学連本部および東北連合会の連続委員として活躍したものは、・・・大正一四年度では、・・・小樽高商は齊藤磯吉であった。³⁴⁾

田中清玄 —— 弘前高校から東大卒。後の武装共産党時代の委員長である。—— は、述べる。(一部テンを加えた)「大正14年に小樽高商軍教事件というのがありまして、小樽高商の軍事教練を廃止する、しないで騒動となって、弘前[高校]でも廃止せよというピラをまいた。・・・学校はただ保守的のただけですから、どんどん社会科学研究会を伸ばして行って、この年に東北学連ができたのです。

—— どんな顔ぶれだったのですか。

33) 『南亮三郎追悼号』66ページ。

34) 渡辺, 101ページ。

35) 島木。本名, 朝倉菊雄(1903-45)。札幌生まれ。東北大中退。後に小説家になる。作品, 『生活の探求』。

36) 玉城。後に経済学者になる。

37) 鈴木(1904-83)。後に憲法学者になる。

38) 島野。後に, 弁護士, 仙台市長になる。

39) 高野。後にジャーナリストになる。

40) 角田。後に弁護士になる。

41) 宇都宮。戦後に政治家になり, 自民党, その後, 無所属。

42) 水田。京大時代, 河上肇のボディガードをつとめた。戦後に政治家, 自民党, 通産相, 蔵相を何回もつとめた。

仙台にあった東北帝大の、島木健作³⁵⁾、玉城肇³⁶⁾に、鈴木安蔵³⁷⁾が中心となって、二高〔仙台の〕から島野武³⁸⁾、高野信³⁹⁾、角田儀平治（守平）⁴⁰⁾、水戸高から宇都宮徳馬⁴¹⁾、水田三喜男⁴²⁾、山県高から亀井勝一郎⁴³⁾、小林多喜二らが来ていた。」⁴⁴⁾

この最後の記述は興味深いものである。多喜二もここにいたというのである。ただしこの発言は、疑問である。この話の時期も、大正14年であろう。それでは多喜二は、拓殖銀行員時代に東北に来たのだろうか。もし大正14年（1925年）秋とすれば、サラリーマンとなって、小樽高商を1年半前に卒業した多喜二が、銀行から休暇をとって、後輩学生たちの運動のために、東北の学連まで出かけるだろうか。それに多喜二はこの頃、終生の恋人となる田口瀧子の救出で苦勞していた⁴⁵⁾のである。さて、既述のように、小樽高商の学連委員は斉藤である。私は田中が、多喜二を斉藤磯吉と間違えているのではないかと思う。もちろん現時点でこれを否定はできず、⁴⁶⁾この発言は半分しか受け取れない。

東北学連は、この小樽高商軍教事件の時、そのさ中、東北帝大（仙台）で開かれた。東北北海道6校の代表40名が集まった。この会議では軍教反対闘争、学生自由擁護を始め、農民運動の方針までも、討議された。東北帝大では専科生であった島木健作（朝倉菊雄）が、東北帝大の中心文士として鮮やかな活動ぶりを示していた。⁴⁷⁾

「大正15年、共産党系左翼理論は『俺は日本のレーニンだ』と自己宣伝していた福本和夫⁴⁸⁾の福本イズム一色でした。東大新人会も社会科学連合会もあ

43) 亀井（1907-66）。後に有名な評論家になる。函館生まれ、東大中退。新人会に参加。

44) 『田中清玄自伝』文芸春秋 1993年、33ページ。

45) 拙稿「小林多喜二とフェミニズム——小林多喜二と田口瀧子との愛」（世界文学会『世界文学』No.78, 1993. 12）；拙稿「小林多喜二の恋」（『人文研究』91しゅう）

46) ここで人間の思考・記憶過程について一言したい。小林多喜二はこのころ有名ではない。田中はその有名ではない多喜二をよく記憶していたのであろうか。小樽高商の学連代表委員は、斉藤磯吉である。小樽から生徒が来ていたことを、田中は、記憶していることは確かだろう。その彼を、小樽高商からということで、斉藤を、後年の有名になった小林と重ね合わせたのではないか。

47) 渡辺、101ページ。

48) 福本。1894年生まれ、山口高商教授をへて、一時期の共産党の理論的リーダー。別稿でも扱う。

げてそうでした。」⁴⁹⁾

学生の社会科学研究が活発になるにつれて、文部省はその禁止を企て、1924年（大正13年）11月には、全国高等学校長会議で学内社会科学研究会の解散について協議し、一斉に解散させることにした。

3 小樽高商軍教事件

第一段階

小樽高商軍教事件について、『緑丘五十年史』の叙述が、短いが的確である。以下、少し利用しよう。⁵⁰⁾これは「実際は軍事教練そのものに対する反対運動ではなかった。」すでに大正6年（1917年）に正式体操振興案というものが出され、体操の中に軍隊教育的なものを入れようとする動きがあり、学校教育は軍隊教育の準備であると公言して物議をかもした軍人などもいた。高商でも大正一二年（1923年）ごろから体操の時間に兵式教練を課することとなり、予備役の陸軍大尉である管講師や加藤講師がこれを担当していた。大正14年（1925年）に入って軍事教練は、体操から独立した別の教科になり、現役の配属将校が学校に配置されることとなった。あるいは年一回、師団本部から将官クラスの査察官が各学校を回った。この年、大正14年の6月25日、3年生は、「敵艦一隻 突如 塩谷近く 顕はれ 早くも上陸」という想定のもとに、手宮公園付近で演習を行っている。ここで塩谷とは、小樽の隣村である。

ところがこの年の秋、10月15日の演習が大問題をひきおこすこととなった。

南亮三郎は書く。

ちょうど大正一四年（1925年）の時から、——つまり多喜二が高商を卒業してから一年後（筆者）——、現役の陸軍軍人がきて、いわゆる軍事教育をやった。戦争がないのに職業軍人がいる、ということになった。また学校は、

49) 『田中清玄自伝』34ページ。

50) 47ページ。この書の執筆は浜林正夫先生である。

はりつけられた軍事教官に給与を出さねばならなかった。

小樽高商の配属将校として赴任してきた教官は、旭川の第七師団からきた現役の鈴木平一郎少佐であった。学生の制服は、正装、和服、正帽、カンカン帽または無帽、靴に下駄という具合に、まったく色とりどりの格好で、教練を受けた。

「この年は 高商創立15年に当たっていた。・・・事の起こりは 陸軍の配属将校鈴木平吉少佐——前出のように、鈴木平一郎である。（筆者）——が作った関東大震災マガイのタイもない演習の想定であった。」⁵¹⁾

1925（大正14）年十月の小樽高商での軍事教練では、大震災がおこって無政府主義者が「不逞朝鮮人」を扇動し暴動をおこしているという想定がたてられた。

震災下のテロを思い起こした小樽港の朝鮮人労働者と評議会系の各労働者が、抗議にたちあがり、全国の大学・高専の学生は、教育の軍国主義化、軍事教練への反対を決議して闘った。

ここで言う震災下のテロとは、関東大震災（1923年）の際、社会主義者と朝鮮人を、警察と民衆が殺した事件である。

違った表現ではこうである。

この大正一四年の秋に、天狗山麓で全校生徒で一大模擬戦の野外演習が催された。問題は、その演習の想定が、東京大震災の時、朝鮮人を絶滅させようとしたものに類似していたことからであった。天狗山中心に地震が起きたとされた。朝鮮人および労働者の暴動を鎮圧するために、小樽高商義勇軍と在郷軍人会がこれにあたる、つまりせん滅せよという、まことに乱暴な想定であった。

翌日には、この非をなじる大集会が、小樽市内はもちろん、校内にもわっと起こった。

金原は書く。「この想定は 震災時の龍現を思わせるものがあった。たちまち激しい非難がおこり、小樽港の3000人の積荷労働者が、震災のさいの生々し

51) 南、『小樽商大緑丘新聞』278号。

い記憶を呼び起こして 立ち上がり、・・・」⁵²⁾と。ただし3千人全部が立ち上がったわけではないだろう。

具体的に言えばこうなる。

大正14年十月十五日、小樽高商では、野外演習が軍事教官鈴木少佐の指揮の下に行われたが、鈴木少佐はその想定として次の方針を発表し、2年生全員は午前8時集合、各組に5枚宛を配布して9時出発、行軍してガッサリ沢⁵³⁾に昼すぎに到着して、午後2時頃に解散した。その想定はこうである。

想定

- 一、十月十五日午前六時、天狗岳⁵⁴⁾を中心として俄然大地震あり、札幌及び小樽の家屋殆ど崩壊し、諸所に火災起り、折柄の西風に火勢を強め、今や小樽市民は人心きょう々として適従するところを知らず。
- 二、無政府主義団は不逞鮮人を扇動し、この時期において札幌及び小樽を全滅せしめんと、小樽公園に画策しつつあるを知りたる小樽在郷軍人団は忽ち奮起し、これと格闘の後、東方に撃退したるが、敵は汐見台高地の天険に拠り、頑強に反対し、肉飛び骨砕け、鮮血に満山紅葉と化せしも、獅子奮迅一步も退かず、ために在郷軍人団の進撃は一頓坐するに至れり。
- 三、小樽高商生徒隊は 応急準備令下り、該隊は午前九時校庭に集合し、隊を編成す。その任務は 在郷軍人と協力し敵を撃滅するにあり。⁵⁵⁾
- 四、支隊長の下したる命令の要旨 左の如し。
 - (1) 敵は 潮見台高地に拠り 頑強に抵抗し 在郷軍人団の攻撃 意の如くならざるものの如し。
 - (2) 支隊は 直ちに出発、在郷軍人団と協力し 潮見台高地の敵を攻撃し 敵をガッサリ沢の隘路内に圧迫し、之をせん滅せんとす。

52) 金原, 342ページ。

53) 場所不明。長年の小樽在住者2人に聞いているが、まだ分ならず。

54) 小樽の町近くの山。天狗山。

55) 渡辺, 103ページ。

- (3) 吉田秀夫外四名は斥候となり 公会堂——住吉神社祠西南四百米火薬庫——真栄町——競馬場を経て潮見台高地に至り敵情を搜索すべし。
- (4) 入江第三中隊は尖兵中隊となり前斥候の進路を潮見台町に向ひ前進すべし。
- (5) 爾余の中隊は本隊となり第二年第一年の順序を以て尖兵中隊の後方三百米を前進すべし。
- (6) 予は 本隊の先頭を行進す。⁵⁶⁾

学生的那珂 捷（昭和2年卒）は、書く。

「ふていせんじん来襲・・・想定・・・軍事教練で、発火演習、全校半千の軍が出征したが、目的地の銭函駅で下車せず、その軍人教官を置き去りにして、村田銃を札幌駅に一時預け、一日遊んで戻るなど、検束を避けるストレス運動は、やればやるほど面白く・・・」と。少数の学生には、そういう人もいた。ただしこれは、問題になった日の軍事教練の叙述ではなさそうだ。那珂は、自分の体験した軍事教練を描いており、当日の軍事教練ではない。続いて彼は書く。もっとも、「あと数年も経っていた時ならば、そのような大それたことをやる奴らは、すべて特高、憲兵によって、即座に逮捕され・・・たはずである」。⁵⁷⁾

この当日、軍事教練の一団が出発したころ、小樽総労働組合執行委員長の境一雄が、小樽高商の社会科学研究会の学生・斉藤磯吉の下宿に、遊びにきた。境は、1923年（大正12年）に早大を卒業し、前出の大山郁夫に教わっていた。斉藤の下宿は、社会科学研究会のメンバーのたまり場にもなっていた。その日も、軍事教練を拒否した数人の学生が集まっていた。境も、学生と雑談してるうちに、かたわらにあった刷り物に眼をとめた。これを読んで、境は怒った。「きみたちは、こんな不届ききわまる軍事教練の”想定”を許していいのか！」⁵⁸⁾

56) 夏堀正元『小樽の反逆』岩波書店 1993年、156-7ページ。

57) 那珂 捷「小樽夜景」（『緑丘』N0.63）

58) 夏堀。この状況は、境が我々にかつてそう話していたので、正しい。

学生たちも、境一雄に指摘されて、抗議することにきめた。この事情を、当の本人である境は、書く。(テンを入れておく)

ある日、僕[境——筆者]は 何となく、この連中がよく集まる斎藤[磯吉]君の寄宿先であった富岡町の某富豪の別邸へ行くと、休みでもないのに皆集まっている。どうしたのだときくと、「発火演習でつまらぬから行かないんだ」。そこに謄写版刷りの演習想定がある。何とはなく手にとって見ると、それは「不逞鮮人が高島海岸から上陸して、小樽市内に発砲しつつ侵入してくる。これを追撃して、せん滅せんとす」という意味のものであった。大正一二年秋、関東大震災のときにも、不逞鮮人という言葉が無責任にまき散らして、罪無きこの人々を殺りくしたことが、後に問題となり、布施辰治弁護士が訴えを起こしたことがあった。当時の弾圧者達のこれが常識であった。僕は大きな憤りをおぼえないではいられなかった。⁵⁹⁾

この裏の経緯について、夏堀正元は、興味深いことを書く。鈴木少佐の想定は、前日に高商の教務主事である村瀬玄教授に示し、承認を求めた後、謄写印刷にまわした。だがそのとき『小樽新聞』の記者がたまたま居あわせ、翌日の教練について尋ねたところ、村瀬教授はさすがにまずいと思ったのか、「不逞鮮人」の箇所を〇〇〇〇にして、その記者に渡した。このため一五日付の『小樽新聞』では、その部分が〇〇〇〇の伏せ字になった。もしこれが伏せ字になっていなかったら、小樽港湾で働いている約二千人の朝鮮人は、その日のうちに立ち上がって、大騒動になっていただろう、と。⁶⁰⁾

しかしこれは、次の渡辺の記述と少し矛盾する。

この想定が、翌十六日の『小樽新聞』三面の欄外に報道されるや、これに対して真っ先に反対闘争のトップを切ったのは、小樽高商社会科学研究会の学生たちであった。直ちに友誼団体と連絡すると共に、学内において猛烈な反対運動をまきおこした。⁶¹⁾

59) 境一雄「軍教反対に立った頃」(『緑丘新聞』)。

60) 夏堀, 158ページ。

61) 渡辺。

この夏堀と渡辺の記述の違いの点は、どちらが正しいのだろうか。『小樽新聞』（大正14年10月15日号）⁶²⁾の第二面で、「高商野外演習」の記事が出た。16日ではない。だからこの点は、夏堀が正しく、渡辺が間違いである。15日に出たのだから、14日に想定文を記者が入手したはずである。その記事の冒頭は、こうある。「高商では今十五日 全校生の野外演習を朝里川水源地附近に於て催す事となったが 午前九時校門を出発し 主に地図の研究と伝令の演習を為す筈であるが 当日の想定 左の如くである。」想定の一、二、三が掲載された。注意すべきは、そのうち、不逞鮮人の4文字が〇〇〇〇となっていることである。⁶³⁾この点は 夏堀は間違っていない。本稿では 渡辺書を幾つかの点で利用するが、残念なことに、この本は軍教事件についてはかなり不正確である。

さて、かつての「小樽新聞」にいた碧川⁶⁴⁾は、震災後、再び小樽にきて、「小樽新聞」整理部長になった。1925年10月には、小樽高商軍教事件の時、記者に積極的な調査を命じた。1927年には小樽を去った。

後に出る『緑丘』（みどりがおか）（大正一四年十二月一七日）⁶⁵⁾の第2面、「経緯」によればこうである。

十月一四日、陸軍歩兵少佐鈴木教官は、その立案した想定を教務部主事村瀬教授に示し、承認を求め、その後、謄写版印刷にした。当時たまたま、小樽新聞の記者が学校に居あわせ、翌日執行の教練について尋ねた。村瀬は、想定文中「不逞鮮人」の四字を「〇〇〇〇」として、その一枚を交付した。それで15日発行の小樽新聞 第三ページ欄外に出た。

一五日午前八時四〇分、生徒一同 校庭に集合、この想定を各組5枚ずつ分配した。午前九時校門出発の演習を実施した。

15日当日は、軍用地図の見方の実際演習が主な目的で、全校生は銃はもちろ

62) 小樽商大所蔵のマイクロフィルム。以下、同様。

63) 1926年10月15日と16日の『小樽新聞』。

64) 作品集として、堅田精司編『碧川企救男論説集』1973年1月、あり。

65) 不二出版 復刻版。

ん佩剣もせず、唯 小樽近郊の地図をもっていった。秩序だった遠足という形で 潮見台の高地に向かった。要所要所では 鈴木教官は枝隊を止めて、各自携行の地図を広げさせ、高度 距離 位置 蜜林等を 図によって回答させ、徹底的に了解させた。ガツカリ沢（ここではガツサリではない）に到着したのは昼過ぎで 少憩の後、午後二時解散した。

境は書く。(テンを入れておく)

斎藤君達は、直ちに学生諸君とその不正不当を訴える運動を起こすと同時に、全学連に連絡をとって 軍教反対闘争の全国的規模へのつながりを作って行ったし、僕は又、当時在樽の朝鮮人団体のリーダーであった金龍植君⁶⁶⁾に連絡し、僕が委員長をしていた小樽合同労組の執行委員会を召集した。正木清、鈴木源重、渡辺利右衛門、武内清の諸君などで 代表者を定めて、金君等と学校に対する抗議を開始した。あの長い地獄坂を十数回登り降りをした覚えがある。この矢面に立ったのが、終戦後の民主主義者苦米地⁶⁷⁾氏で、その反動振りは相当なもので、あれが苦さんの本当の姿であると、今でも僕は信じている。間もなく この事件が東京で大きくとり上げられ、神田の美土代町のキリスト教会館で軍教反対演説会が開かれ、僕は代表として出席したが、六時開会の演説会が九時頃迄に三十人位の弁士のうち、大山郁夫先生の三分位 三宅雪嶺⁶⁸⁾先生の五分位で、他は「私は……」「弁士中止ッ」で、両先生をのぞいて他は 全部、錦町警察のぶた箱に検束ほうり込まれてしまった。学生運動の方は、主として早大の軍教反対闘争に合流して、確か学生大会に斎藤君が代表で出席した筈で この頃から闘いの場は中央に移り、小樽高商を中心とした渦巻は表面的に鎮まったように見えたが、しかし学内の動揺は深刻かつ大きかつ

66) 金。朝鮮出身。小樽で活動した。朝鮮労働青年会委員長。1926年のメーデーに参加した。(堅田編『北海道社会運動家名簿』)

67) 苦米地英俊、当時高商教授。後、伴校長の後を継ぎ、第3代校長になる。ここで「民主主義者」とは、皮肉で言っている。

68) 三宅 (1860-1945)。本名、雄二郎。金沢生まれ。思想家。東大卒。志賀重昂とともに「政教社」を結成し、『日本人』を創刊。日本主義を主張した。

た。．．．⁶⁹⁾

こうもいわれる。高商の高松教授を中心として、読書会があった。その会の一部の学生が、この想定を、人道人権問題上とりあげ、全国の社会主義思想団体に檄を飛ばすだけでなく、小樽市内の団体とタイ・アップして、グラウンド開き記念運動会に、檄文を書いたビラをまいたり、校長にたいして抗議を申し込むなど、相当騒ぎが大きくなった。

翌十月十六日午前9時、政治研究会小樽支部（代表）の境一雄、札幌支部の太田栄太郎⁷⁰⁾、朝鮮人団体の金竜植 その他数名は、小樽高商を訪問して伴校長〔房次郎。高商第2代校長〕⁷¹⁾に抗議したが、〔彼が出張で〕上京不在のため、中村和之雄主席教授の自宅を訪れ、想定文の不穏当不公正をあげて抗議し、学校当局としての声明書を要求した。中村教授は、教練教官や教務部主事に立案の次第等を調査する必要があるとして、即答せず、翌日午前10時に会見すると約束した。同日16日午後7時、中村教授宅で村瀬主事と鈴木教練教官、ほか数名の職員が会議し、「十月十五日 本校の実施したる野外教練想定中誤解を招致する所ある語句を使用したるは教育上遺憾とす」と、口頭で述べることを協定した。

17日午前十時過ぎ、前記の団員十数名は中村教授を訪れ、後出の抗議声明書を出し、これに対して学校当局の声明を要求した。中村は前記協定の通りの口頭答弁をしたが、彼らは声明書を要求した。だが校長の命を待たなければできないと説いたので、彼らは、理解し、すぐ校長に面会を望むとあって、帰った。だが正午過ぎ、帰り道、鈴木教官宅を訪れ、野外教練の想定を正当だと信じて立案したのかどうかを、鈴木教官個人の意見を質問した。鈴木は、想定は仮想であり、何等根拠ない情況を作為しているものなので、教練実施上正当であると信ずるが、誤解を招くような語句を用い、その結果、諸君の感情を害し

69) 中村の稿、『緑丘五十年史』。

70) 太田。札幌で活動する。政治研究会札幌支部メンバー。三・一五事件の被告家族の救援活動をする。(堅田による)

71) 伴。小樽高商第2代校長。拙稿「小樽高等商業学校と渡辺龍聖」(『商学討究』44の4) および「小樽高商の先生たち」(同、45の1) 参照。

たのは、まことに遺憾に思うと、言った。彼らは やや不満の色を表し、抗議
声明書の意味を繰り返し、軍事教練を駁撃して去った。

19日に 校長が帰校し、二十日朝 校長は彼らと会見すると通知したが、都合
によって1日延び、二十一日午前十時半に 改めて正式会見し、前記代表8名
が学校にきて 会談した。校長は、「想定中に無用の語を羅列し いささか思慮
を欠きたるを憾みとする」旨を述べた。抗議団は 強く声明書を要求し、伴校
長は対面（ママ）にこだわって対外的に想定を取り消しを表明することを拒否
するにいたった。「学校として声明書を与える限りにあらずる」を述べた。無
産団体代表は 直ちに正式文書で 次のような質問書を発して 文書による回答
を要求した。⁷²⁾ 彼らは、この件については飽くまでも当局の責任を糾弾する
とあって、去った。

ここで、人格者といわれた伴先生も、大したことがないようだ。しかし、当
時の時代を考えれば、やむを得ないかもしれない。彼らの質問書は以下の通り。

質問書

小樽高等商業学校 軍事教練野外演習想定に対する抗議書

左の条項に関し、学校当局の明確なる答弁を求む。

- 一、想定第二項中「不逞朝鮮人」の語句を使用したることに對し学校当局は如
何なる考えを有するや。
- 二、吾々の同胞たる朝鮮人を目するに、常にかくの如く白眼視し、日鮮親善を
口に説くも、今日の如き想定を認め、是を実施するは結果において日鮮間
の反発憎悪を拡大しこれを刺激誘導するものなり。是に関し、学校当局は
如何なる手段方法を以てその疑惑を解かむとするや。⁷³⁾
- 三、今回の想定全体の成作立案の動機或はその出発点は明白に大正一二年九月
一日の関東地方震災当時の事情にあり。学校当局及立案者たる鈴木軍事教
官は既にこれを是認せり。

72) 渡辺および手嶋。および『緑丘』大正14年12月17日。

73) 渡辺。

然らば 関東地方震災当時、無政府主義者 朝鮮人労働組合運動者に対する官憲の圧制的行為は 甚だ不公正なるものありとして糾弾され、天下の輿論これに伴えり。然らば 斯くの如き不法行為を 敢て為さしめたる不穩なる事情に、想定立案の動機及基礎的觀念を有し、又斯くの如き非常識極る想定の下に殺戮方法の演習を施行したることは、全然正当なりとするを得ず。此の点教育上の一大問題たり。されば吾々は該想定の断片的字句觀念を不公正不穩とするに非ずして、全想定を不公正不穩なりと主張し且つ全想定に隱密に包含されたる軍事教育の軍国主義的計画に対して抗議するものなり。学校当局は全想定の不公正なるを認むるや否や。

四、前質問事項に述ぶるが如く斯くの如き不公正なる想定の下に行はれたる軍事教育が学生に及ぼす処の精神的結果は断じて軽々視するを得ず。比の点に関し教育上の重大問題たり学校当局の申開き如何。

五、「軍事教育の目的は団体訓練に在り」と伴校長は言えり。然らば今回の想定に見るが如きものを以て是を為さざるも其の目的を達し得ると信ず。然るに特に斯くの如き教程をもってするは明白に教育機関、学校の軍隊化に非ずして何ぞ、殊に想定は他に其の仮想敵をもってするも何等差支無く又可能なりと言明せられたる以上、特に之を選択したることは、軍事教育の真意が学校の軍隊化に在り、学生の觀念をまげて軍国主義化せむとするに在る事を立証するものなり。其の団体教練と云ふは一片の対社会的弁明に過ぎず又単純なる考へより立案したるものなりと云ふも、殊に朝鮮人の内乱を予想したることに對して此れを深き思慮なくして為したりと言ふが如きは一の遁辭に過ぎず。されば今回の想定により暴露したる軍事教育の正体に関し、又教育機関の軍隊化内乱等の予想等の全精神の不公正に関し学校当局の明確なる答弁を求む。

六、教務主任村瀬教授は、該想定に對し当初より不穩と認め発表に當り小樽新聞社に「不逞鮮人」の字句に對し欠字の申出を為せり、不穩不公正と認め猶且、是を實際教程として施行したる点に関し、教育上学校行政上の一大問題にして之の責重大なり。此の点に関する学校当局の申開き如何。

- 七、先に学校当局は全想定の不穏不公正なることを声明せり。然るに其の後伴校長の云ふ処、一に「不逞鮮人」の一句の使用にのみ不穏不公正と認むるが如し。吾々は前に述ぶるが如く一觀念一辭句に対して抗議するに非ずして全想定に対して不公正なりと主張するものなり。此の点学校当局の一致せる意見如何。
- 八、今回の想定立案者たる鈴木軍事教育教官の該想定に対する正邪に関する鈴木少佐の意見表示に就き、学校当局は先に今回の如き疑惑を生ぜしめる事申訳なしと云ふ挨拶ありしのみ、学校当局としては其真意在る処を調査しその明確なる意思表示を望む、且又同氏の責任在る処を如何なる方法に抛りて之を明らかにするや、此の点の明示を要求す。⁷⁴⁾
- 九、学校当局先きに今回の想定を不穏当不公正なりと認め、学校当局の失態を認容し、社会の疑惑を招き、朝鮮人に不安の感を与え、其の激怒を誘発せしめたることに就き、その責任を負うと言明せり。
- 然らば 其の声を明らかにするに 如何なる方法を以って之を為すや、吾々は当然 当該責任者の辞職を勧告す。

右回答は大正一四年十月二十七日まで当方に御郵送相成度候

大正一四年 十月二十三日

小樽 総 労働組合
 朝鮮人親睦会 有志
 政治研究会小樽支部
 政治研究会札幌支部
 北 潮 新 報 社
 青 年 同 盟
 右責任者 境一雄

小樽高商校長 伴 房次郎殿

75)

74) 夏堀。

75) 渡辺

この無産団体の質問書に対して、十月二十七日、伴校長の名で、次のような回答書が代表境一雄あてに郵送された。

回答書

大正十四年十月十五日、当校において実施したる野外演習想定に関し、同月二十三日付御質問の趣き了承、御貴問第一項は これまで屢々言明したる通り誤解を招致したる処ある字句を不用意に使用したるは 教育上遺憾なりと思惟す。第二項以下は 一種の想像または意見を基礎として推論せる予断の下に作成せられたるものと認め、弁明の限りにあらずと存候

大正十四年十月二十七日

小樽高等商業学校名長

伴 房次郎

小樽総労働組合

朝鮮人親睦会代表

政治研究会小樽支部

政治研究会札幌支部

北潮時報社

青年同盟

右責任者 境一雄 殿

鈴木少佐は「不明を謝す」とあやまった⁷⁶⁾、とされる。多分抗議団体が彼の家へ押し掛けた時の発言と推量される。この事件は、ある意味で鈴木少佐の社会的センスの古さから起きたとも言える。

境は書く（テンを入れておく）。

76) 手嶋, 62ページ。

校長は人格円満な伴先生であり、われわれや在樽朝鮮人団体の代表者と学校当局はト部教授、苫米地参議院候補者⁷⁷⁾であった。軍教の教官は鈴木という陸軍少佐で、腹のすわらない臆病な軍人で、まともな答弁もできない男で、皆んなのちょう笑を買っていた。その頃、全国的に学生の社会科学研究会がつくられ、北大では高倉新一郎⁷⁸⁾、前参議の東 隆君などがリーダーであったし、高商では、この事件で学校を追放となり、東京の巣鴨高商時代に亡くなられた高松教授を中心にこれも苦闘の人生の中に死んだ斎藤君、卒業後 道新記者時代胸を病って死んだ寺田君、京大（九大の誤り、筆者）に潜っていった黒田君などが 一二、三人で勉強していた。確か大正14年の秋のことである。その頃、どこの学校でも秋期軍事演習という戦争ごっこが行われていた。⁷⁹⁾

ここに言う寺田行雄（1905-1944）は、小樽市に生まれた。1924年（大正13年）に、小樽高商社会科学研究会の創立に参加した。小林多喜二の友人であり、高商で一級下であった。軍教反対事件で停学処分をうけた。しかしこれに参加しているというのは、少なくとも、卒業は大正15年（1926年）ではなかろうか。卒業後、「北海タイムス」小樽支社に勤務した。そして労働農民党に参加した。1928年（昭和3年）の三・一五事件、および1929年（昭和4年）の四・一六事件で検挙され、一二月一日事件⁸⁰⁾で起訴された。1931年（昭和6年）十月に上京し、1937年（昭和12年）11月に反戦運動で検挙された。1944年（昭和19年）6月、大阪で病死した。警察側では思想要注意共産主義、とした。彼は全協活動をした。寺田行雄には姉・節子がいた。多喜二の姉チマは、小林家と寺田家と親しい間柄だった、と言う。⁸¹⁾

77) 当時参議院候補者であったのではない。戦後である。

78) 高倉。その後、北大教授になる。北海道史、アイヌ史の研究者となる。

79) 『毎日新聞』小樽版、昭和36年9月8日。

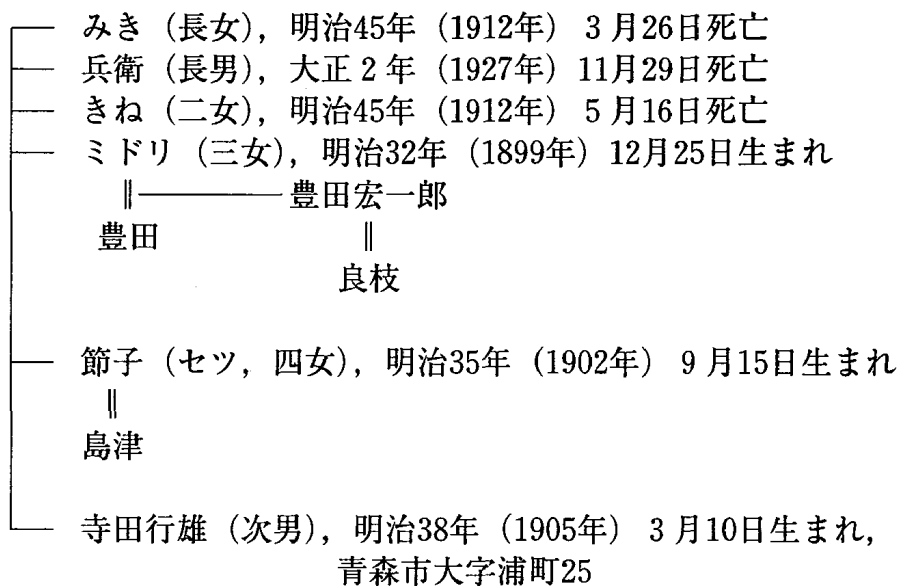
80) 全協事件。

『小樽新聞』（大正14年10月29日）は伝える。（現代漢字とし、句読点を補う。）

「全国的問題となった 高商の軍教想定 小樽総労働更に学校側へ 声明書発表を要求す」の項である。

「小樽高商の軍事教練想定問題は、既報の如くにて、今や全国的の大問題となりたるが、過般、小樽総労働組合其他より学校当局に対し、九ヶ条の回答を要求するに対し、二十八日午後に至って、学校は別項の如く 九ヶ条中 不逞鮮人其他に就いてのみ回答し、外は回答の限りにあらず云々とありしを以て、小樽総労働組合、政治研究会札幌支部、同小樽支部其他の代表者は、二十八日午後 回答に接するや 直に協議を開き結果、学校の回答は甚だ不誠意なりとして、代表達は再び学校を訪問、回答に対する不誠意を難詰し、学校側に声明書を要求するところあった。当日は 折々視察に來道せる 栗屋文部省専門学務局長も、

81) 寺田行雄（1904年生まれ、1944年6月大阪にて死亡）。



両親は、行一、いと、である。寺田家は、南津軽郡居村出身、小樽区奥沢町4丁目25番地に転籍した。ミドリ、節子、行雄は、小林多喜二一家と、家族ぐるみでつき合った。ミドリは、明治32年（1899年）生まれ、明治39年（1906年）4月、青森師範付属小学校入学、大正3年（1914年）に、小樽市量徳小学校高等科に入学。道庁の為替貯金局に勤務している時に、妻子のある豊田氏（大分出身で朝日新聞の記者）と結婚した。その子・宏一郎は札幌で生まれた。行雄が結核を患ったので、姉や豊田家親子3人とも、それが原因で亡くなった。（加藤東一郎・安田昭三氏調べ、佐藤好徳氏提供）

学校当局に対して問題の真相を聴取する所あった。今回の問題発生するや、政治研究会小樽支部は直に東京の学生連盟に通謀したるため、之が全国的問題となりし訳で、軍事教育反対の氣勢は各所に挙がったが、国際学生連盟日本支部は二十八日、東京神田青年会館にて、小樽高商問題より軍事教育に対する反対の批判演説会を開催した筈で、政治研究会小樽支部員の一名は、二七日夜、上京の途に就いたが、右は問題の真相を学生連盟其他に報告の爲めである」と。

この一名は、境一雄だろう。

渡辺は書く。この回答を発した学校当局は、問題の拡大を恐れて学内運動の弾圧と切り崩しに奔命した。政治研究会をはじめスタートしたばかりの札幌の無産団体は、この想定を、大正十二年九月の関東大震災における大杉栄⁸²⁾一家の虐殺事件や、亀戸労働者の虐殺事件、朝鮮弾圧の模倣したものであり、社会主義運動に対する弾圧であるとして、境一雄、鈴木源重、木田茂晴⁸³⁾をはじめ、各地の組織を動員して演説会を開催し、軍教反対、高商糾弾の運動を展開した。⁸⁴⁾

「この回答を発した学校当局は」というのは、変である。この回答は抗議団へのものであり、回答と弾圧とは直接関係ないからである。

東京で学連は、1925年（大正14年）10月21日に、文部省と小樽高商当局に抗議した。学連の代表者たちは、この事件について文部大臣に面会を請うたが、拒絶された。

「小樽高商の軍事教練に対して、全国の社研連合会は猛然と反対に立ち上がり、野呂〔栄太郎〕⁸⁵⁾も文部大臣に抗議する一員となり、そのため警察に検束された。」⁸⁶⁾より詳しく云えば、こうである。

82) 大杉栄(1885-1923)。無政府主義の著述家・運動家。関東大震災の時、伊藤野枝(1895-1923)、甥とともに、憲兵によって虐殺された。

83) 木田(1894-1950)。青森出身。労農党札幌支部執行委員。

84) 渡辺、105ページ。

10月28日に学連は、芝で軍事教練反対演説会を開いた。翌29日には学連の全国代表が再び文部省に抗議にいった。その時、学連の代表数は50名か90名であり、彼らは代表5名を選び、岡田文部大臣に面会を求めたが、岡田はこれを拒絶した。野呂栄太郎もこの5人の1人であった。彼らは鈴置政務次官に面会し、2時間にわたって抗議した。野呂は、新聞記事など綿密な資料を突きつけて、理路整然と次官を追求した。代表5人が抗議を終え、応接間を出ると、日比谷警察署の警官50名余が待っていて、代表たち全員を含め10名ほどを検束した。⁸⁷⁾

『小樽新聞』（大正14年10月31日）は伝える。

「小樽高商問題から 検束者を出す 文部省に押掛けて 騒ぎ立てた学生達」の項である。（現代漢字にし、句読点を補う）

「日本学生社会科学連盟会員六十余名は、二十九日午後三時 文部省に押掛け、過般小樽高商野外軍事教育の想定問題に対し、その責めを問たるに、文部当局の回答は甚だ不真面目なりとて、再び文相に面会を求めたが、文相は面会を避け、鈴木政務次官 代わりて面会押問答をなしたが、結局要領を得なかったため一同喧騒を極めたので、日比谷署から田村署長以下三十余名の警官嚴重警戒し、騒擾者を鎮撫すると共に、五名を検束するに至った（二十九日東京発）。」

検束者が、前者では10名、後者では5名、警官が、前者では50余名、後者では30余名と、違っており、どちらが正しいか分からない。

『東京朝日新聞』大正十四年十月三十日の、「学生五十余名 文部省に押寄す 仮想敵の問題から」では、こういう（現代漢字にする）。「去る十五日 小樽高商の軍事教官鈴木少佐が 野外演習の想定に不平鮮人を仮想敵にしたこと

85) 野呂栄太郎（1900-1934）は、北海道生まれ。このとき、慶応大学経済（=理財）学部にて在学していた。後に、日本共産党委員長になる。主著『日本資本主義発達史』。『日本資本主義発達史講座』を編集した。研究文献は、次の2つの注を見よ。拙稿「経済学者 野呂栄太郎」（『商学討究』45の2）もある。『野呂栄太郎全集』新日本出版社、あり。

86) 塩沢富美子『野呂栄太郎とともに』未来社 1987年、76ページ。

87) 松本剛『野呂栄太郎』信州白樺 1983年、136ページ。

が端なくも問題になり朝鮮労働同盟、労働総同盟などが起ち演説会を開いて当局の不注意をきうだんし、又各大学の社会科学連合会では さきに山 x 文部参事官を訪問同問題を詰問してゐたが二十九日午後二時半頃 小樽高商（学連の - ではないか。 - 筆者）の代表五十名は 文部省に出 x（一字読めず - 筆者）大臣に面会を求めた処 面会を拒絶され、押し問答が初まり ゴタゴタを始めたため 日比谷署から制私服五十名かけつけ、結局五名の検束騒ぎを演じた後鈴置政務次官が面会することになり事はおさまったが「その問題は遺憾なことで当局としては責任は負うが、どうしてその責任を果すかは言明できない」との要領得ない答弁に学生側では更に文部当局が甚だ遺憾であったことを天下に公表すること将来かくの如きことを防止することその他三ヶ条の要求書を提出五日以内に返答するようにと要求して午後五時退出した。」⁸⁸⁾

ここで「不平鮮人」というのは「不逞・・・」であろう。演説会というのは、二九日に東京の神田で開かれた演説会であろう。

さて小樽では、抗議団は、校長の回答を不服とし、あくまで質問書の全項目について学校の態度を明らかにする声明書を出すようにと、要求したが、学校側はこれを拒否したので、この事件は一応落着をみたのである。

『緑丘』（大正14年12月17日）は、「学生大多数声明書に署名し・・・」の項で言う。抗議団対学校と 事件は、日を追って粉料を重ねて行くに従って、如何なる結末となるか、形勢はにわかに分からなかった。この間我々学生は学校に信頼し、この問題は学生間にも殆ど話題にもならなかった。

同じく「経過」の項でも言う。本事件〔抗議団がきたこと——筆者〕発生後、学校職員及び生と間に何等動揺の形跡を認めず教練教官に対する職員生徒の動静亦何等の異変なく教練亦予定計画通り実施されている・・・、と。

ところが、抗議団と学校の粉料が収まったかに見えた10月30日になって、学

88) 荻野富士夫先生から資料を頂いた。

生有志が軍教反対のビラをまき、事態は一転して学校対学生という形をとるにいたった。

訂正

「大正時代の小林多喜二の評論活動と彼の思想」（『商学討究』第46巻第4号，1996年3月），2ページ，注4で，論争社とあるが，論創社の誤り。榊原氏にご指摘いただいた。

これは，高商史研究会の活動の一結果である。